

エペソ人への手紙1章18節 「心の目が開かれて」

1A 霊の世界

1B 開かれて見えてくる世界

2B 神と御使い

3B 霊の目を開かれる主

2A 霊的真理

1B 神の召しにある望み

1C 神から与えられる義

2C キリストに似た者

2B 望みの知識

1C 天の栄光

2C 不正の管理人

3B 聖徒の相続

1C 聖徒たちが受け継ぐもの

2C 神の資産である聖徒

1D 畑の中の宝

2D 砂のような神の思い

本文

エペソ人への手紙1章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、エペソ書に入っています。前回、1章の前半を見ました。今日は午後礼拝で、15節以降を一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、18節に注目します。「**また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか**」ここだけを読むと、文章が終わっていないので分からないと思います。これは、パウロが、エペソの信者たちのために祈っている一部です。ということで、前後関係を見るために、17節から19節まで読んでみましょう。「**どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。**18 **また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、**19 **また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。」**

1A 霊の世界

この箇所を読むと、パウロが、エペソの人々が、神の御霊によって、神を知ることができるようにと祈っているのが分かります。神ご自身を知るだけでなく、18節では、私たちがどのような召しを

受けているのか、また聖徒たちの受け継ぐものが何かを知ることができるように、と祈っています。そして、神の力がどれほど偉大なものかを知ることができるように、と祈っています。

1B 開かれて見えてくる世界

私たちが前回、エペソ人への手紙 1 章の前半を見てお分かりのように、神はすでに、天上にある、すべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださったこと、キリストにあって祝福してくださったことを学びました。すでに、これらの祝福は用意されているのです。けれども、問題が、いや、祈りの課題ですね、そのことが自分の心の中で見えていないということです。大いなる宝が目目の前にあるのに、その価値が見えていないために用いていないという問題があります。私たちに必要なのは、主に与えられている恵みが足りないのではなく、ありあまるほどなのに、見えていないというのが問題なのです。それで、パウロが、「**あなたがたの心の目がはっきり見えるように**」なるように、と祈っているのです。

これが、キリストの弟子たちにとって、大きな問題となって立ち足はだかっていました。イエス様が何度となく、ご自身が十字架にかかり、三日目によみがえると言われても、彼らの心は閉ざされたままでした。主はよみがえられて、エルサレムから離れて、エマオに行く弟子たちに現れました。そして、イエスご自身が近づいて来て、彼らと共に歩き始められました。ところが、「ルカ 24:16 二人の目はささげられていて、イエスであることが分からなかった。」とあります。イエス様が質問をされて、彼らがそれに答えて、それで主は、ご自分についてのことを、聖書全体から説き明かされました。そして同じところに泊まり、共に食卓に着いて、パンを裂いた時に、ようやくイエス様だと分かりました。その時にイエス様の姿が見えなくなりました。

そして、弟子たちの真ん中に現れました。イエス様は、そこで手と足をお見せになり、また食事を彼らの前で召し上げられました。そして、再び聖書を説き明かされますが、「聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。」とあるのです。主の福音に心が開かれるまでに、これほどまでの主の働きかけがあって、ようやく彼らは、見るべきものが見えたのです。

預言者エリシャのことを思い出してください。アラムの王とイスラエルの王が戦っていました。アラムが、たびたびイスラエルに入って来ては、待ち伏せして急襲しようとしたのですが、すでに見破られていました。それが一度や二度ではありません。エリシャがイスラエルの王に、すべて前もって伝えていたからです。アラムの王は、側近たちに「お前たちの中から情報が漏れている！」と、それを知ったアラムの王は怒り、馬と戦車を、エリシャの住む町に送りました。そして、エリシャのしもべが朝早く起きて、外に出ると、なんと、馬と戦車の軍隊が町を包囲していたのです！それで、若者は絶望して、「Ⅱ列王 6:15 ああ、ご主人様。どうしたらようでしょう。」と言いました。エリシャは、かわいそうに思いました。自分たちが包囲されていることを、かわいそうに思ったわけではありません。そうではなく、自分の見ているものが、まだこの若者に見えていないから、かわいそうに思ったの

です。祈りました、「6:17 どうか、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」そうしたら、「主がその若者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。」とあります。

目に見えるところでは、町を包囲していたのはその通りです。しかし、その包囲していた軍隊を、天からの戦車、火の戦車や馬が取り囲んでいたのです！ 私たちが肉眼で見ていることは、それは事実です。しかし、この目に見える世界だけが世界の全てではないことを知ることは、絶対に必要です。目に見えない世界、霊の世界があり、その霊の世界のほうが、目に見ている世界よりも力があり、目に見えている世界を動かしているというのが、真実なのです。

2B 神と御使い

聖書には、神は霊であると書かれています(ヨハネ 4:24)。目に見えないのです。そして、天使たち、御使いたちがいることも書かれています。これらも、目に見ることができません。天においては、すべての天使が良い天使で、神に仕えているとは限りません。墮落した天使がおり、その筆頭がサタン、悪魔です。サタンが、この世で罪を犯している者たち、肉の欲で生きている者たちを、自分の思うままに動かしているのです。「2:1-2 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、2 かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」

こうした霊の勢力が数多くあるなかで、神は、イエス・キリストを死者の中からよみがえらせました。そして、これらの霊どもの上に、ご自分の右の座に着かせたというのが、イエス様がよみがえられ、天に昇られた時に起こったことです。「エペ 1:20-21 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」神は今、これらの霊的な勢力を、ご自分の凱旋の行列で、見せ物にしておられます。「コロ 2:15 そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」

3B 霊の目を開かれる主

御霊の働きは、私たちに死活的です。これらの肉眼で見えないものを、信仰によって、見えるもののようにして確信させてくださるからです。ちょうどそれは、私たちが互いの脳みそを肉眼で見えないのに、脳があると確信しているのと似ています。互いの心臓を見てもいないのに、心臓があると確信しているのと似ています。見てはいないけれども、確実にあると知っているように、御霊が、霊的真理を明らかにされるのです。

パウロが、コリントの教会の人々に、このように説明しています。「I コリ 2:12-13 しかし私たち

は、この世の霊を受けたのではなく、神からの霊を受けました。それで私たちは、神が私たちに恵みとして与えてくださったものを知るのです。13 それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。」ですから、私たちが聖書を読むというのは、極めて霊的な活動であることを知ってください。イエス様が、ご自分のことばのことを、「わたしがあなたがたに話して来たことばは、霊であり、またいのちです。」と言われました(ヨハネ 6:63)。聖書を開く前に、聖霊が、みことばを知ることができるように祈るといいです。詩篇の著者も、こう祈っています。「詩 119:18 私の目を開いてください。私が目を留めるようにしてください。あなたのみおしえのうちにある奇しいことに。」

2A 霊的真理

1B 神の召しにある望み

そして、心の目が開かれたら、パウロが祈っているのは、「**神の召しにより与えられる望みがどのようなものか**」知ることができるように、というものです。この望みとは何でしょうか？1章の前半で、私たちは、父なる神が私たちを選ばれて、キリストにあって、御前に聖なる者、傷のない者にしようとされた、とあるのを読みました(4節)。それから、神の子どもしようと、愛をもって予め定められました(5節)。そして、キリストが血を流されたことによって、私たちを贖ってください、すべてのものがこの方にあって一つに集められ、私たちが御国を受け継ぐ者となったともありました(11節)。これらは、すでに与えられているものですが、確かめるのは将来です。それで、「**望み**」と言っているのです。もう目で見ているのであれば、望みではありません。見ていないから、望んでいるのです。パウロは、コロサイの人たちに、キリストが栄光の望みだと言っています。「1:27 この奥義が異邦人の間でどれほど栄光に富んだものであるか、神は聖徒たちに知らせたいと思われました。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」

1C 神から与えられる義

キリストが栄光の望みとは、どういうことか？それは、栄光のお姿で主が現れる時に、私たちは義を身にまとうということです。「ガラ5:5 私たちは、義とされる望みの実現を、信仰により、御霊によって待ち望んでいるのですから。」私たちは、信仰によって神の前で義と認められていますが、自分自身が義となっているわけではありません。それで、ガラテヤの人々は、偽教師らによって惑わされて、律法の行いによって義と認められようとしていました。それは、どんなによく見えても、肉の行いなのです。正しいように見えて、実は争いや妬み、そしりなど、肉の行いが現れます。では、私たちは、義についてどうすればよいのか？それは、信仰によって待ち望むです。御霊によって、待っていることです。イエス様は、「マタ 5:6 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。」と約束されました。今は義とされていないけれども、御霊によって、主が必ず戻って来てください、その時に自分を神の前に出させてくださることを知っているのです。

2C キリストに似た者

ヨハネは第一の手紙で、この望みによって、今、私たちは清められることを教えています。「Ⅰヨハ 3:2-3 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。3 キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」このように、私たちが召しによって与えられている望みとは、これほどまでに栄光に満ちているものであり、それを御霊によって知ることができるようにと、祈っています。

2B 望みの知識

1C 天の栄光

パウロは、このような天の栄光を知っていたので、今の苦しみを耐えることができました。彼は、第三の天に引き上げられたことを教えています。パラダイスのことです。「Ⅱコリ 12:4 彼はパラダイスに引き上げられて、言い表すこともできない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。」あまりにもすばらしいので、それを人間の語ることばで言い表すことによって、その栄光が限定されてしまうので、許されていないとまで言っているのです。この後で彼は自分の肉体に棘があることを知りました。けれども、むしろ、その弱さを大いに喜びましようと言っています(9節)。

その他にも、ロマ書で、「神の栄光にあずかる望みを喜んでいきます。それだけではなく、苦難さえも喜んでいきます。」と言っています(5:2-3)。また、「今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないとは私は考えます。」と言いました(8:18)。天に蓄えられている望みが、いかにすぐれたものかを知ることによって、今の苦しみが取るに足りないと知ることができるのです。これが大事です。

2C 不正の管理人

しかし、天の望みについて語ると、「天国のことばかり考えて、地に足がついてないね。」とか、「地上のことを考えていないね」とかいう意見があります。そういった過ちは、確かにあるでしょう。テサロニケの教会では、主が戻って来られるということを理由にして、きちんと働いていない者たちがいました。パウロは、働かない者は食べるな、と言って、強く戒めています。けれども、本来、天の望みがあるからこそ、そこに宝を蓄えるために、この世のことに賢くなるのです。それを言い表しているのは、不正の管理人の喩えです。彼は、不正がばれて、主人に解雇されそうになっていました。それで、解雇される前に、債務のある人々のところに行って、その債務の証文の額を書き換えて、低くしたのです。そうやって恩を売りました。そして、自分の次の仕事を探す時に、なんとか、恩を売った人々のついで、次の働き口を探そうとしました。

これは、「今、与えられている富で、それを活用し、将来に備える」ということで、知恵があるので

す。それでイエス様が言われました、「ルカ 16:8-10 主人は、不正な管理人が賢く行動したのをほめた。この世の子らは、自分と同じ時代の人々の扱いについては、光の子らよりも賢いのである。9 わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。10 最も小さなことに忠実な人は、大きなことにも忠実であり、最も小さなことに不忠実な人は、大きなことにも不忠実です。」ここでの教訓は次の通りです。私たちは天に思いをはせて、地上のことをないがしろにしがちです。「小さなことだ、これらのことは」となってしまいます。けれども、そうしたことをもきちんと、主にあって忠実であるならば、その報いが天に用意されるのだ、ということです。天の御国に栄光があるから、報いがあるからこそ、地上のものを、しっかりとやりくりしていくのです。

3B 聖徒の相続

そして、心の目が開かれることによって、「**聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか**」知ることができるように、と祈っています。

1C 聖徒たちが受け継ぐもの

これは、1 章 11 節に、「**キリストにあって、私たちは御国を受け継ぐものとなりました。**」とあるとおりです。主の用意されている御国を、私たちは、主人からの褒美として受け取るのです。「マタ 15:21 よくやった、よい忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」とあります。主が喜ばれて、ご自分の国をキリストにあって、受け継がせてくださいます。

それが、どれほど栄光に富んだものか知ってほしいと、パウロは願っています。前回、聖霊が、神の贖いの頭金であることを学びました。後に来る栄光の、ごく一部なのだ、先んじてその前味を楽しんでいるのだということを学びました。将来は、言葉にならない栄光に満ちた喜びがあります。

2C 神の資産である聖徒

しかし、実は、本文のギリシア語の読み方によっては、別の読み方ができるのです。新改訳 2017 の下にある注釈には、1 章 11 節には、別訳「**神の資産となりました**」とあります。またここ、18 節も、「**聖徒たちが神の資産であることが**」と訳すことができることを説明しています。分かりますか、これは、私たち聖徒自身が、神にとっての資産だと言っているのです！神が、私たちを宝だと思っておられるということです。イスラエルの民を、神は「**宝の民**」と呼ばれました(申命 7:6 等)。

1D 畑の中の宝

イエス様が、天の御国の奥義の喩えを語られた時に、「**宝**」について話されました。「マタ 13:44-46 天の御国は畑に隠された宝のようなものです。その宝を見つけた人は、それをそのまま隠しておきます。そして喜びのあまり、行って、持っている物すべてを売り払い、その畑を買います。45

天の御国はまた、良い真珠を探している商人のようなものです。46 高価な真珠を一つ見つけた商人は、行って、持っていた物すべてを売り払い、それを買います。」

二つの喩えがありますね。一つは畑です。これは、畑が世界のことを指しています。その世界の中に、みなさんがいるのです。みなさんが宝だとみなしているのです。その宝が見つかって、あまりにも喜んで、全財産で畑全体を購入してしまいます。これは、神が私たちが宝とみなし、ご自分のものとするために、御子キリストの流される血という対価を払って、それで世界全体を贖われるということです。もう一つは、真珠ですね。これも同じ考えで、私たちが高価な真珠のように貴いと思われ、それで全財産を叩いて、つまり、独り子のいのちを与えることによって買い取りました。

2D. 砂のような神の思い

このように、みなさんがどれほど貴いかを、御霊によって知ってほしいとパウロが願っています。もちろん、これは私たちに何か良いものがあるからではないですよ！恵みによるのです、良いものが何一つないのに、ただ、こよなく愛しておられるのです。どうか、主がみなさんを、砂の数のように、思いを多くして心に留めておられることを知ってください。「詩 139:17-18 神よあなたの御思いを知るのはなんと難しいことでしょう。そのすべてはなんと多いことでしょう。18 数えようとしてもそれは砂よりも数多いのです。私が目覚めるとき私はなおあなたとともにいます。」